

インタビュー

# 教員養成大学・学部の 未来図を展望する

—プロとしての教員を証明するEd.D.のシステムとは—

質の高い教員養成のための学位「Ed.D. (Doctor of education)」を提唱する北海道教育大学蛇穴治夫学長。教員養成と教員の質の保証を目的に連携する鳴門教育大学の山下一夫学長を聞き手に、教員養成大学の実情と、展望を語ってもらった。



コロナ禍の2021年1月15日、北海道教育大学学長室と鳴門教育大学学長室、協同出版社長室をZOOMで結んでインタビューが行われた。

聞き手

鳴門教育大学学長

山下一夫 Yamashita Kazuo

1953年生まれ。1983年京都大学大学院教育学研究科教育方法学専攻博士課程単位取得退学。1999年学術博士。1986年京都大学教育学部助手。1988年鳴門教育大学講師に着任。以降、教授などを経て、2016年4月より現職。著書に『カウンセリングの知と心』（日本評論社）、『生徒指導の知と心』（日本評論社）など。

高度な専門職業人として  
子どもの良さを見抜く力量を

山下 現在、教員養成大学・学部は非常に厳しい時代であり、連携して高度化と効率化を図らなければならない

話し手

北海道教育大学学長

蛇穴 治夫 Jaana Haruo

1956年生まれ。1981年北海道大学大学院理学研究科 修士課程修了。1986年北海道大学 大学院理学研究科 博士後期課程修了（理学博士）。1984年北海道教育大学教育学部旭川分校助手に採用、2005年より教授。2007年から国立大学法人北海道教育大学理事を経て、2015年10月より現職。

という国の方針も打ち出されています。そのひとつのモデルとして、一大学で北海道内に札幌、旭川、釧路、函館、岩見沢という5つのキャンパスを構える北海道教育大学に注目してきました。また、一昨年からは北海道教育大学と鳴門教育大学とが協力し、教員養成においてコン

ピューターを使った試験——CBT（Computer Based Testing）——の開発・運用を進めています。

本日は蛇穴学長にお話をうかがうことになりました。最初に、教員とはどのような職業だとお考えかをお聞かせください。

**蛇穴** 一言で言えば、様々な困難を乗り越えて子どもの成長を支える尊い仕事で、医者や弁護士に並ぶ高度な専門職業人だと思います。教育全般、そして子どもの心身の成長・発達、教科などに対する専門的知識を総動員して、教育活動を計画・実践・評価・改善する能力を持たなければなりません。その前提となるのが教育的な愛情と仕事への使命感です。それがあれば、生涯にわたって学び続けていく態度が失われることはないと思います。

そして、先生には子どもたち一人一人の良さを見抜いて、個別に生きる道をアドバイスできる力が必要な気がします。本学では、学生にそうなってほしいという願いを持って教育をしているつもりです。教職とは難しさもありますが、遣り甲斐のあるものだと思います。

**山下** 個々の子どもの良さを見抜くことは大事ですね。

## 教員を育てる教育学部の現場から そのあるべき姿とは

**山下** 教員の養成を担う大学教員のありべき姿についてどうお考えですか？

**蛇穴** 自分の専門分野における最新の理論や知識を持っていることは前提ですが、学問的立場から見て間違いのない教材を子どもの理解度に応じた形で提案でき、そしてそれが学校現場でどれだけ効果的であるのかを臨床的に研究していることが大事だと考えています。

以前、総合大学の先生から、教育学部において教科の専門を教える大学教員は、理学部や文学部のような専門学部から派遣すればいいのではないかという話をされたことがあります。私はそれには反対しています。学ぶ学生の立場に立って考えればすぐにわかります。小学校の教員になろうとすれば、10教科にわたる教科の専門的内容と指導法、道徳の理論・指導法、生徒指導の理論・方法など、ほかにもまだありますが、非常に多岐にわたる分野のことを学ばなくてはなりません。教員一人が担当する部分はほんの一部ですが、だからこそ理学部や文学

部での講義とは異なっています。学生は一つの学問を深めるわけではないので、学校教育で扱われている教科内容について、その個々の専門的内容の本質的理解にいたる構成を考え、学生には何を勉強しなければならないのか、また、そのことが適切な教材開発のためには必須であることを自覚させ、自律的な学修を促してやるのが重要です。さらに、教科の内容は当該教科に閉じたものではなく、他教科とも有機的に関連づけられ、さらには学級経営上の課題や教育実習ともつながりがあります。そのため、講義をして自分の学部に帰られてしまったら十分な学生教育になりません。少なくともゼミを持って学生とつきあっていくことが必要です。

そのように考えると、教員養成を担う大学教員は、基礎研究をする側面と、臨床研究をする側面の両面が必要だということだと思います。言葉を換えれば理論と実践の両方に軸足を置いて教育に携わり、学生の実践的な能力を育成していく姿勢が大事なのだと思います。

**山下** 言い換えれば、教職課程内の教科専門科目がミニ理学部、ミニ文学部になってはいけないということですね。教員養成系大学が長く課題にしてきたことでもあり、大変重要な問題です。

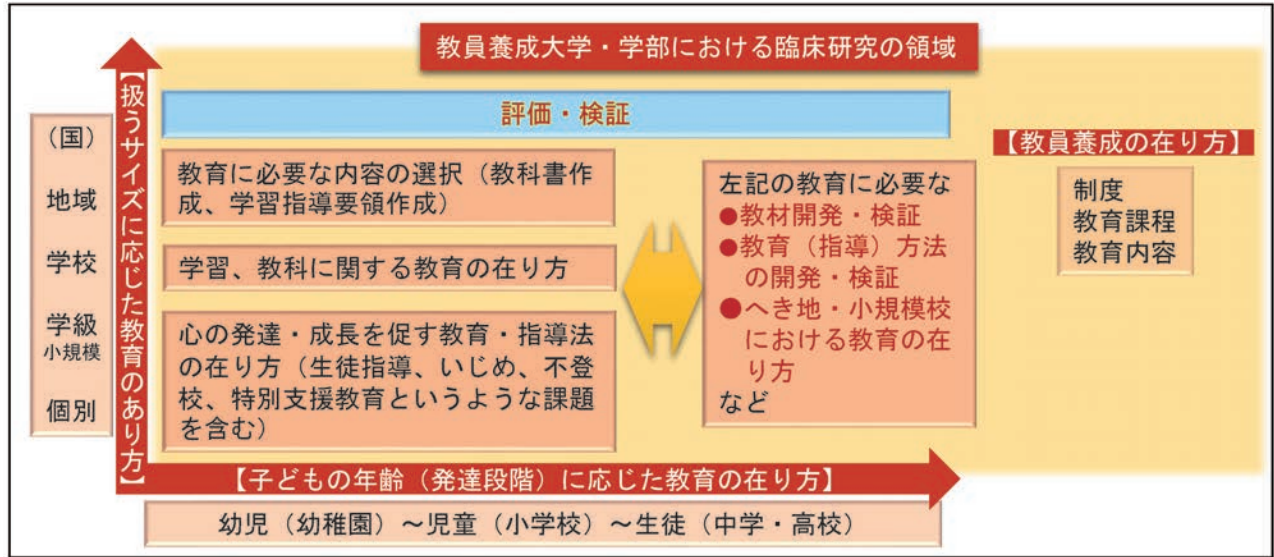
**蛇穴** そう思います。そのことについては、平成13年の「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会」でも、教員養成学部の独自性や特色を発揮していくためには、教科専門科目の教育目的が他の学部とは違って、教員養成の立場から独自のものがあるはずだと提言され、平成29年の有識者会議におけるさらに踏み込んだ提言へとつながったような気がします。

**山下** 基礎研究と臨床研究、理論と実践、これは教員養成にとって重要なことです。教育についても研究し、それをいかにして教育に生かすかが問題だ、と思います。

**蛇穴** 同感です。教育と研究を切り離して、「カリキュラムに位置づけられている授業をこなしているから責任は果たしている」という考えでは、教員養成は難しいと思います。

**山下** 教職大学院ができた今では多くの大学で、大学生に対してだけではなく現職の先生にも授業をしなければなりません。そうなることや、「学校現場で何の役に立つんですか」と指摘されます。そこで本学では、先生たちに、たとえば生徒指導上でどのような悩みがあるか

図1 教員養成大学・学部における臨床研究の領域（作成者：蛇穴学長）



を率直に話してもらい、事例検討会を徹底的に行います。すると本学の教員も、臨床研究的に学校現場で役立てるにはどうしたらいいかを考え学ぶようになってきました。要するに教員養成系の大学教員には、自分の専門の研究だけでなく、教育のための研究もアイデンティティにしてほしいということです。

**蛇穴** 私も大学院生を指導するようになって、一度教科書を網羅的に検討して「理屈抜きに暗記せざるを得ない構成になっている」ような箇所を見つけ、大学院生と共に学問的立場から教材を開発し、附属学校で実践して見たことがあります。そのことが臨床的研究の契機になったと思います。若い教員は学問を究めることも大事です。一方で、キャリアに応じて臨床的な研究も増やして、教員養成教育の質を高めてほしいと願っています。

**山下** 現職の先生たちが受講すると、大学の教員もすごく鍛えられますからね。

**蛇穴** 少し話が飛ぶかもしれませんが、旧帝大系の教育学部と教員養成大学・学部との違いを基に、教員養成大学・学部で行うべき研究のフィールドといったものをどう考えているかを述べてみたいと思います。

旧帝大系の教育学部では、細かい点ではそれぞれ違いはあると思いますが、人間と教育との関わり、社会における教育というものの機能及びそれを実現する制度、心身の発達と学習の仕組みそのもの、などの分野において、その専門家として分析・研究を行う能力を育成していると捉えています。

それに対して教員養成系の大学・学部では、「子どもの年齢（発達段階）に応じた教育の在り方」という軸と、「扱うサイズに応じた教育の在り方」という2軸に囲まれた領域、及び教員養成の在り方に関する問題が研究領域だろうと考えています（図1）。具体的に言えば、「教育に必要な内容の選択」「学習、教科に関する教育の在り方」「心の発達・成長を促す教育・指導法の在り方」など、教育を行う臨床の場に生ずる課題や、教員養成の制度と教育内容などが研究課題だと考えます。

**山下** それに関していえば、たとえば専門の物理学でPh.D.を取得した人を、ほとんどその専門業績だけで、教員養成大学・学部の教員として採用しているケースもありそうですが、いかがですか？

**蛇穴** 採用時はその通りです。問題は、そのような教員

**Ed.D.の背景**  
 Doctor of Education. 博士課程を修了した者に授与される学位の一つ。教育現場における専門的で実践的な問題解決を目的に、Ph.D. (Doctor of Philosophy) と比較して、より臨床的な研究である点に重点を置いて認証、授与される。米国では1920年にハーバード大学で初めて授与されたとされ、日本では、2000年代から教員養成系大学で提唱されるようになった。



## Ed.D.システムを通して臨床的課題に取り組める大学教員を（蛇穴）



## 教員養成の大学教員は教育のための研究もアイデンティティーに（山下）

の中に、少なからず出身学部に戻ってしまうケースがあることです。教員養成教育と臨床研究にやり甲斐を見出して定着してほしいと思っています。元々学問が好きで研究者になったと思うので、専門的な研究を継続できる環境の整った専門学部に移りたい気持ちは理解できますが、その学問の面白さを子どもに気付かせる教育ができる教員の養成に力を発揮してくれたらいいと思っています。そこで、臨床的な研究学位を授与する博士課程で、採用後に学位取得を求める制度をつくってはどうかと考えています。

### 教員養成のプロとしてのEd.D. 教育課題に挑む教師の育成のために

**蛇穴** つまり、教員養成を担う研究者教員は、大体がPh.D.を持っています。さらに、臨床研究に関する学位論文をまとめてEd.D.の学位を取得してもらおう。この過程で教員養成の専門性を理解してもらいたいと考えています。実務家教員と呼ばれている人たちは学校現場での経験が豊富で、多様な事例に触れてきていると思います。その実践を理論に照らして深く問い返し、それを実践研究論文としてまとめてEd.D.を取得し、その成果に基づいた教育を行う資質・能力を高めてもらえれば、研究者

教員共々、基礎的な研究と臨床研究の両方を行う教員が教員養成を担うこととなり、全体として教員養成教育の高度化が図れると考えています。

今申し上げたとおり、Ed.D.型の博士課程で研究指導を受ける対象が、既に研究者である方と実務家教員というように、それまでの背景が異なる方々を想定していますので、自ずとプログラムが違ってなければなりません。前者はリサーチワーク中心で、後者はコースワークとリサーチワークの組み合わせだと思います。教職大学院からストレートで来る学生も対象にするなら、さらに別のコースワーク中心のメニューが必要になると考えています。

**山下** なるほど、Ph.D.とEd.D.の比較が今日の話の核になりそうですね。ちなみに、兵庫教育大学の連合大学院は、Ph.D. (Education), 博士 (学校教育学) です。

**蛇穴** Ph.D.とEd.D.との違いについても触れなくてはなりません。Ph.D.は、学問の深い研鑽を通じて得た学識と、自立して研究活動を行える能力に対して与えられると考えられます。研究能力は、書いた学位論文が独創性と学術的価値を備えているかを審査されて認定されます。

一方、Ed.D.をどう捉えるかですが、その前に教員養成学部における教育と研究について俯瞰しておく必要があると思っています。教員養成学部で行う教育は、様々

な学問の成果を基礎としています（図2）。教員養成に必要な教科内容や子どもの発達・成長、教育制度などを理解するための専門的知識や理論、技術は、「基礎学問」とそれを基に行われた臨床研究の成果の中にあります。学校で使う教科書、学習指導要領の内容も同じだと思います。

教員養成学部特有の研究というものを考えてみると、自分の学問を背景に、教育の場に生ずる課題解決につながる臨床研究を行うとか、教育の目的にふさわしい内容を、日々新たな成果が生み出されている基礎学問の成果から抽出して、教科書や学習指導要領を構成し直し、その効果を検証することなどが考えられます。

例えば、子どもがどうしてもつまずいてしまう教科の学びがあったとします。それに対して、学問体系に照らして理解を促す材料を補って新たな教材を構成し、異なる集団に対しても少しの変更で対応できることなどを証明したとすれば、課題解決に使った材料は学問的に既知のものでも、これまで埋もれていた学問の成果を使って新たな教材を創造し、教育課題を臨床的に解決したことになります。このような新たな知見と、博士課程で身につけた高度な知識と技能に対して、仮にEd.D. in Science Education（教科教育に関する教育博士（専門職（理科）））を授与できれば、教員養成学部における研究とそれに基

づく教育の高度化につながると考えています（図2）。

## 教職大学院で 自分をさらに鍛えてみよう

**山下** 誰が主査・副査になって、学位を認定をするのかという問題もありますね。

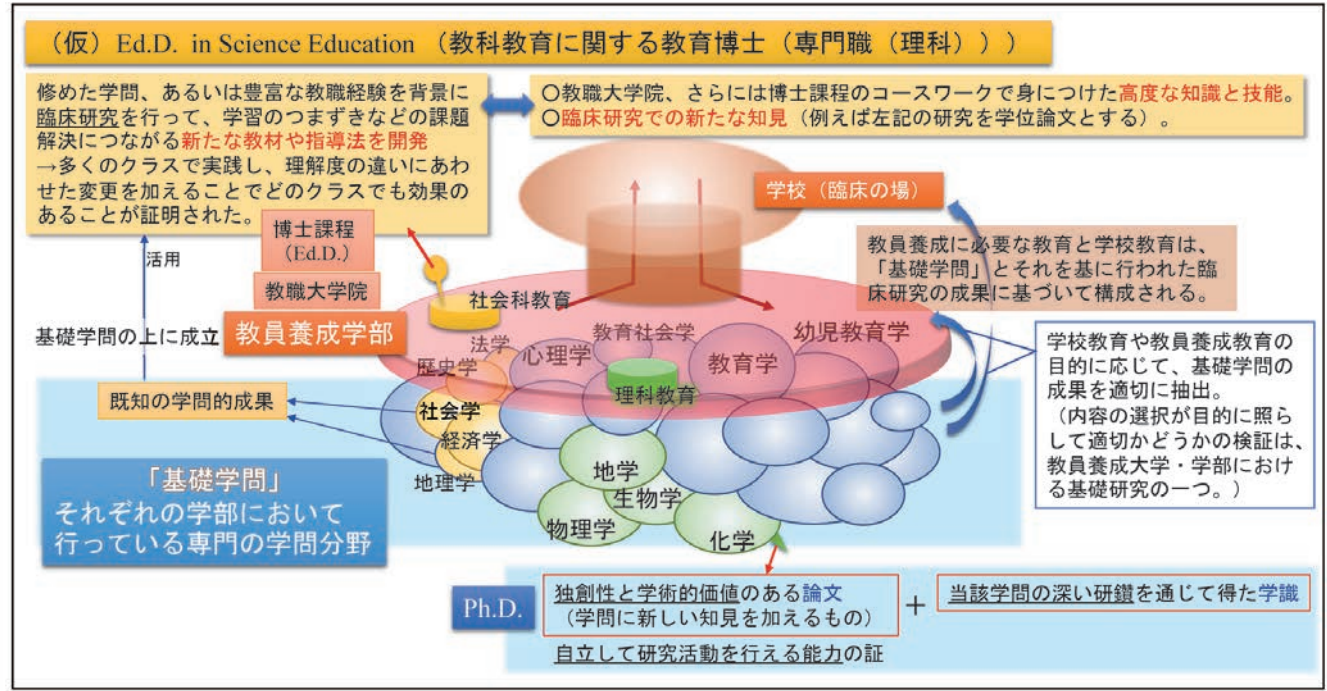
**蛇穴** これは今後相談しながら作っていくべき問題です。国際通用性ということも念頭に置いて、今後の課題です。

**山下** ところで、博士課程がない大学は、博士課程をもつて大学に論文を提出して取得する可能性もありますが。

**蛇穴** 確かに遠隔技術も進んできましたので、研究指導も遠隔でできるのかもしれませんが。特に、既にPh.D.を持っている研究者教員であれば、問題は少ないと思います。ただ、教職大学院を終えて教員として頑張っている方が博士課程での研究と必要な学修を行う場合、身近に研究指導、あるいはその補助ができる大学教員がいることが必要ではないかと考えています。そのあたりの制度設計も大事だと感じています。

**山下** それから、私が大きな問題と思っているのが、修士や教職修士、さらには博士の学位取得に対するインセンティブが日本ではほとんどないことです。大学院で学ぼうという気持ちに水を差しているのではないかと心配

図2 Ed.D.の考え方とPh.D.（作成者：蛇穴学長）



です。入口での問題、つまり大学院に行く人は少ないですよね。

**蛇穴** 確かに、本学でも教職大学院の定員割れは大きな課題です。教員を目指す気持ちが強い学生ほど、早く教職に就きたいと考えるのかもしれませんが、経済的な問題が絡んでいるかもしれません。大学としては、プラス2年で自分がどう変わるのか、もっとわかりやすく教職大学院の意義について説明していかなくてはならない気がします。先生のおっしゃるように、インセンティブについてはもっと議論しなくてはなりません。

博士課程の方は、教員養成学部の大学教員を将来に向けて計画的に養成・育成していく制度として設計する必要があると感じています。理学部などの専門学部・大学院を終えた方なら大学へ採用後、教職経験の豊富な方なら学校に勤務しながらEd.D.を取得してもらい、理論と実践、あるいは基礎と臨床の両方に軸足を置いた大学教員になってもらいたいと思っています。

**山下** とくに今の日本は大学で何を学んだか、なぜ修士や博士にいったのが問われない社会になってますね。

**蛇穴** 私たち自身、もっと学位の意味について訴える必要があるのかもしれませんが。教員養成学部においては、学士は基本的な知識と技能を身につけた証。教職修士(専門職)なら、学校現場の課題を広く俯瞰的な視野から見

て、課題解決への道筋に見当をつけられる能力、そして、同僚と共に課題に取り組むリーダーシップ。Ed.D.は教員養成学部の教員として、実践力ある教員の育成能力と臨床研究を遂行する能力の証、というように。

『教職課程』の読者は、今教師になろうと一生懸命勉強中だと思います。教師は困難に出会うことがあってもやりがいのある尊い専門職だと感じています。その夢を是非叶えてもらいたいと思います。その上で、教職大学院に行って、課題の芽を摘み取る目や、多様な実践を企画できる基本的研究力を身につけて高度な専門職として活躍してほしいと思います。そういう人の中から、将来(創設されていれば)Ed.D.型博士課程で学び、教員養成学部の教員として活躍する人が生まれてくれればいいと期待しています。

学部→教職大学院→高度専門職業人(教師)→その中からEd.D.型博士課程を経て教員養成学部の大学教員へ、というシステムがうまく回ればいいと思っています。

**山下** システムの理念としては大賛成ですが、やはり、定員割れは現実問題として残念です。

**蛇穴** だからこそ今、協力して前向きな改革を推し進めていかなくてはならないときだと感じています。

**山下** ともに改革を推し進めましょう。今後ともよろしくお願いします。本日はありがとうございました。

## インタビューを聞いて

教員養成系大学・学部、あるいは教職課程の担当教員が、自分の教科専門などに閉じこもり、学校現場や子どもたちの具体的な実態に関心を示さず、問題解決の意欲を持たないとすれば、教員になろうとする学生の臨床教育に好影響を与えることはできない。その点から、教員養成に携わる大学教員も、教員養成系博士課程で学び、専門学問を学校教育に結び付けるEd.D.を取得する意味があると考えた。

北海道教育大学は道内に5つのキャンパスを持つ連合体であるので、連合の博士課程を設立することも十分考えられる。

学校現場ならびに教育委員会では、必ずしも教員の学歴の差別化を望んでいるのではなく、むしろ平等化を望ましいと思っている。しかし、予測不可能で経験したことのない事態が起こりうる令和時代の学校現場に、高度の専門性を持つ人材を備えることは必要であろう。その点からも、中堅教員には博士課程に学びEd.D.を取得し、プライドと責任感を持って活躍していただきたいと思った。



協同出版社長・主筆  
小貫 輝雄 Onuki Teruo